

小さい者の一人が減びることは天にいますあなたがたの父のみ心ではない。



社会福祉法人

小羊学園

〒433-8105

静岡県浜松市北区三方原町 2709-12

電話：053-414-1833 FAX：053-438-7707

E-mail kohitsuji@imix.or.jp

H.P http://www.kohitsuji.or.jp/

発行人：稲松義人

印刷所：聖隷サービス(有)

定価：一部30円

2011年2月20日

第334号

つばさ静岡からの報告

つばさ静岡 事務長

羽山 純

つばさ静岡では、2月15日、次年度に向けた勉強会を開催しました。施設長以下の管理職と、現場の最前線に立つ主任、副主任総勢23名が参加し、16時から20時までの時間に行いました。

これだけの職員を、日常業務の中から抜き出してくるわけにはいきませんから、早番の勤務を終えたものや、休日を返上して参加するものも多くあります。

新しい年度に向けて、職員が課題意識を共有し、思いを新たにすることが目的でした。内容は、①来年度から新たに主任となる職員がメンバーとして感じた問題の指摘から始まり、②定着率を上げるための新人職員の指導③職員の資質向上に向けた研修の在り方、③次年度の体制、④短期入所の受け入れ方針の確認、⑤多職種による「協働」の推進、⑥管理者、主任の役割、連携の在り方、としました。

どのテーマも、重要で、困難な課題を含んでいて、短時間で結論に達することはできませんでしたが、たくさんの重要な意見があり、課題として共有することができたと思っています。

その中で、①、②のテーマについて。看護師の確保は、どの医療機関も共通の課題です。これだけ、問題だとされているながら抜本的対策が政策的に講じられないことが不思議です。むしろ一層の大都市、先端医療現場への集中が図られ、地方、中小の医療機関は困難を増していくように見えます。が、そんなことを言っているのも現実には解決しません。誰でもいいから来てほしいというのが本音です。しかし、重症児者看護は一般の医療機関での看護とはかなり性格が異なっています。その点を十分に伝えられないままに、着任し日々の業務に追われる中で、これまでのキャリアとのギャップに悩み、やりがいを見いだせないままに去っていく人たちも少なくありません。最近福祉職も応募者が減ってきています。在宅福祉、自立支援が中心となり、入所型で、「自立支援型」ではない重度障害のある人への支援、三交代の勤務などが敬遠されているのではないかと感じます。

こうした中で、新人職員をチームの一員として受け入れていくために、新人研修の在り方が問われます。つばさ静岡では2年前の担当者が、新人研修向けの講義プログラムを作成しました。これを中堅職員の意見を取り入れて修正を行い、昨年度から使用しています。しかし、これまでその内容について主任クラスに十分周知する機会を持つこ

とができず、研修内容と現場のギャップを指摘されたこともありました。また、年度の中で採用した職員については、確実に実施できずにいました。今回その重要性を再確認し、研修の確実な実施と、その内容が現場に反映されることの必要性が確認できました。

2年目以降の職員を対象に行なったステップアップ研修は、グループワークを中心に実施してきました。施設での利用者支援はチームによって行われており、そのためには、職員のコミュニケーション能力の向上が必要であると考えているからです。専門職として知識や技術の向上に努めることは当然のことですが、それを活かすことが出来るチーム作りを研修の中心課題としています。

開設からの5年間、つばさ静岡は一つ一つの規模は小さいですが、チャレンジを続けて来たと思います。今年も、在宅者向けに、ペースト食などの特殊な形態の食事の提供サービスに新たに取り組み始めました。

それでも、支援の拡大を求める在宅の利用者はたくさんいますし、入所する人たちへの支援ももっと充実したいと思っています。

与えられた環境は厳しさを増しています。それでも、山積する課題に萎縮することなく、胸を張って向き合っていこう、という山倉施設長の呼びかけで研修を終りました。

小羊学園福祉対談①

「地域の課題としての子育て支援への取り組み」

河村良枝さん（元浜松市こども家庭部長、現在里親、小羊学園監事）
稲松義人（小羊学園理事長）

障がいのあるなしに関わらず、子どもの育ちを支えていくことは、大人に課せられた大きな責務です。今回、浜松市こども家庭部長をされた川村さんをお招きし、子育て支援における地域の課題について、対談をしていただきました。

とに焦点を合わせて、今というケアホーム、地域で暮らすことへの意欲が強かったのですが、理事長になったときからあらためて「児童福祉」への思いをもつようになりました。現在は、法人全体では成人された方たちの支援の方が大きな事業になっていますが、小羊学園の最初の仕事は知的障がい児が対象取り組みに残したいと考えました。新しい対象者に出会わなければ、新しいものに取り組む姿勢が損なわれると考

えたからです。
河村さんは、現職は退かれておられますが、行政的な視点から浜松市における児童福祉の現状を考えると、どのような課題意識をもっておられたのでしょうか。

河村

稲松さんのお話のように、薬剤師として保健所で働いていたので、福祉の仕事に就くことになるとは思っていませんでしたし、知識ありませんでした。そんな中で受けた国の研修で、「福祉事務所長の職には哲学が必要」と指摘されたのです。それまで哲学なんて考えて生きていたわけではありませんが、とても新鮮で且つ難しい課題でした。そこで、福祉関係法令等を勉強するに当たり、まずは「法（の）精神」を読み取ろうとしました。そして「人としての尊厳を守ることができるような、自立支援」を目指したいと思いました。自立とは一様ではありません。その人なりの自立なので、他人や行政が押し付けるものではないでしょう。行政の施策は兎角、一律になりがちなので、難しい目標でもあります。また、子どもの尊厳を守り自立を支援するのはどうしたら良いのか。自分自身の子育てを思い出しても、随分、親の都合で身勝手な子育てをしていたと思います。障害の有無に関わらず、人として、家庭の中で安心して育つことができる



よう、親、特にお母さんを支援すること、子ども達の健やかな成長を支援することができないのではないかと思います。お父さんが子育てに参加することの大切さなど、行政は仕掛け人にはなれます。また、多くの民間の皆さんの力を有機的に繋げることで、より大きな仕事ができるようにすることも行政の仕事です。当事者にはなれない歯がゆさもありますが、縁の下力持ちになることはやりがいがありました。

稲松

私も行政の責任は大きいと思います。が、すべてを行政に期待するというのも本来ではないと思っています。小羊

稲松

河村さんに最初にお会いしたのは、同じコーラスグループのメンバー同士ということ、もう30年くらい前のことになりました。当時は浜松市の保健所に勤めておられましたが、その後福祉関係の部署に移られ、最後はこども家庭部長をされました。私たちが三方原スクエアの構想をもって浜松市に相談に伺ったときに、たまたま担当部署におられたことには、神さまの不思議な導きを感じています。

私が直接支援する現場で仕事していたときには、目の前にいる人たちのこ



稲松義人理事長

学園のような事業者も、制度の枠の中で事業展開するというだけではなく、地域のニードに効率よく対応していく力をつけたいと思います。ここに社会福祉法人としての役割があると思っています。また、市民にもそのことを伝えていかなければならないと感じます。

河村さんは退職後、里親をしておられますが、里親も公的な費用が出ていくという点では制度ですが、それで家計を支えるというところまでは保障されていないと思います。市民の立場で地域の社会的養護のニードに対応しておられるということだと思います。日本には、養育里親が広がらないというのを聞きますが、どんなことを感じておられるでしょうか。

河村

子どもたちには、仕事に就き、生計を立てることの大変さや充実感、家族の語らいや支えあいの中から生まれる信頼関係など、普通の家庭の営みの中で生きる基本を提供したいですね。里親は二十四時間、年中無休のボランティアです。何人もの子どもを育てている先輩里親には本当に頭が下がります。措置費には、僅かですが報酬に相当するものがあります。しかし、それを期待しては、里親は務まりませんね。実子がいなくて特別養子縁組を希望する里親に偏るのも無理からぬことです。児童擁護施設でも職員さんが疲弊



川村良枝さん

するほどに頑張ってくださいますが、制度的に、家庭の味には届きません。近年、団塊の世代が退職して里親になる方が増えてきました。施設にいても、週末里親の制度で、「家庭」を経験することができるといい制度なので、もっと多くの方に里親になって頂きたいですね。

稲松

三方原スクエアでは児童部が、最初の児童入所施設の役割を引き継いでおり、そこから広がって、短期入所、日中一時預かり、通学支援、保護者の相談などに取り組んできました。私自身は現在、南区に開設した事業所に通勤し、その中で特別支援学校の子どもの児童保育に取り組んでいます。障害の有無にかかわらず、子どもたちに

豊かな放課後の生活の場を提供することの大切さを実感しています。放課後というのは、こどもにとっては「自由な時間」「遊び」の時間です。ここで友だちと一緒に育ちあったり、様々な体験を積み重ねたりして、たくましく育っていくのではないかと思います。そこが、どうしても管理的になりがちで、学校教育との違いだと思っています。この部分の制度化が遅れていると感じます。必要な予算はぜひつけて欲しいですが、これまでのように施設を作って、運営のための費用のすべてに行政が予算をつけるというこれまでの発想では、よい活動が展開しないのではないような気がしています。

河村

行政の支援には限界があります。



親の会や施設など現場にいる方には叶いません。今ある制度が本当に実のある支援になっているのか、常に検証が必要ですね。小羊学園さんには、どの子も家族の一員として地域社会の中で、育っていくことができるよう、家族支援を充実して頂きたいですね。また、地域の色々な事業所と連携し、分担しあって、社会的支援の輪を広げ、社会に発信して頂きたいですね。

稲松

ありがとうございます。今日伺ったご意見も参考にしながら、これからも小羊学園にできることに精一杯取り組み、また、地域の方々に向けて、福祉社会の実現のために発信していきたいと思っています。お忙しいなか、ありがとうございます。



オリーブの樹 増築工事

浜北区尾野にある生活介護「オリーブの樹」が活動室の増築工事をほぼ終えようとして、4月から新たなスタートを切ります。前身の「工房わかぎ」からこれまでに、何回かの改修を行なって放課後支援事業も展開してきましたが、建物の構造上、利用者の空間分けが難しく、同一空間で過ごすことによってお互いに影響が見られていました。今回の増築で「わかな」（放課後支援）の子どもたちは2階で過ごし、成人の利用者は1階で活動をされます。

4月には地域の人たちもお招きし、竣工式を行う計画も立てています。新しくなった「オリーブの樹」に、皆さまも是非一度お立ち寄り下さい。



温心寮 移転改築工事始まる

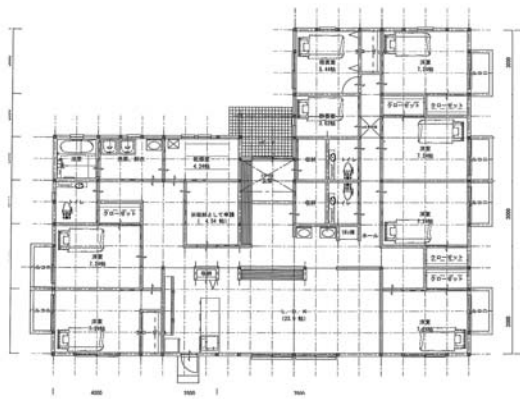
平成14年に法人で地域生活支援を最初に開始した「温心寮」が、建物の老朽化と火災警報装置設置義務に伴って、移転改築する運びとなりました。

「温心寮」は三方原スクエアから徒歩2分の距離にあり、住宅とお茶畑が混在する環境の良い場所にあります。

以前は聖隷学園学生寮でしたが、学生のニーズ減少によって、その役目を障がい者の生活寮に引継ぎました。法律の改正に伴って、生活寮・グループホーム・ケアホームと肩書きは変わってきましたが、施設では



なかなか得られない暖かな家庭的雰囲気、温心寮で生活されている入居者の方は心安らいでくれました。8年暮らしていましたが、建物自体に傷みが激し



いため、移転改築することとなりました。

新しい「温心寮」は浜松乗馬学校に隣接し、三方原スクエアからも徒歩1分の場所に建設する予定です。木造平屋建てで、6名の利用者が自分の部屋を持ち、キッチンやリビングなど楽しく会話できるスペースも広く持っています。今回も「カトレア」同様、住宅メーカーのプレゼンテーションを行い「アキュラホーム」が建築することになりました。

3月から本工事に入り7月中旬に引渡し予定です。新しくなって、そこで生活される皆さんの笑顔を見られること、また安全で快適な生活を提供できることが今から楽しみです。

小羊学園を支える会

2011年度寄付金報告

1月受付分 682,232円 (53件)
累計 6,415,885円 (484件)

小羊学園への寄付金振込み先

(口座名義)「小羊学園を支える会」
郵便振替口座 00890-4-45415
りそな銀行浜松支店 (普通) 040005
静岡銀行細江支店 (普通) 043483
ご希望があれば、郵便振替用紙をお送りいたします。
下記へご連絡ください。
小羊学園を支える会事務局 (鈴木)
三方原スクエア内 ☎053-414-1833

編集後記

先日の「はままつフォーラム」で、日本グループホーム学会入居者委員会の方々と浜松市在住のグループホーム入居者によるワークショップを聴講させていただきました。このワークショップは入居者の方々が運営され、直接の支援者は帯同できないことになっていったが、第三者の立場でお話を聞かせていただいた。ワークショップに参加された入居者の方は、みなさん自己表現ができ、初対面にもかかわらず様々な意見を出し合っていて、小羊学園にはない新鮮さを感じると共に、当事者同士で話し合うことの大切さを感じた。少しづつ寒さが和らいできましたが、まだ明け方は冷え込みが厳しいです。どうぞお身体ご自愛下さい。